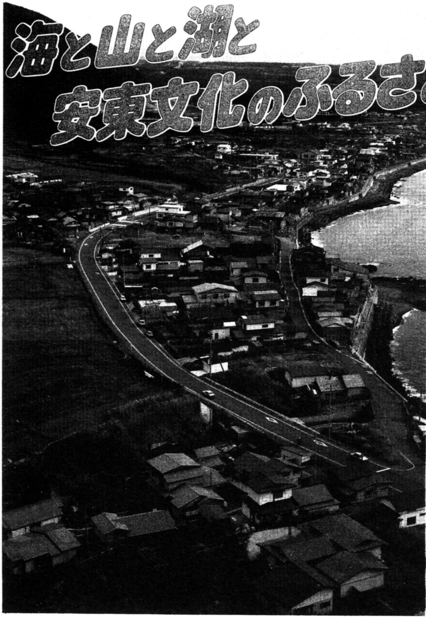
広報
しうら
昭和60年
10月号
特集号

海と山と湖と 安東文化のふるさと



限りない未来へ向って――〈不動山から脇元地区を望む〉

祝 市浦村誕生30周年

新しい時代が求める新しい村づくりをめざして、苦悩と激しい陣痛の中から誕生した市浦村は、今年で三十周年という記念すべき年を迎えました。

この三十年を振り返ってみますと村誕生以来、幾多の困難に遭いながらも私たちの先達は「地域創造」をテーマに積極的に取り組み〝新生市浦村〟を育て上げてきた努力の結晶をみることができます。

当時に比べて人口こそ減少してはいるものの、時の流れはいま、二十一世紀へむけて大きなうねりとなっています。

村誕生三十周年を契機に、市浦村の一体勢を確立すること、地域の恵まれた資源を活用した明るく豊かな村づくりをするための道程を一歩一歩前進していくことが必要であります。村民一人一人が手づくりのマチづくりに創意と工夫を凝らし、限りない未来を秘めた「新しい市浦村」建設に努力したいものです。

村民憲章

昭和六十年十一月一日制定

わたしたちの先人は、海と山と湖とに抱かれたこの地をこよなく愛し、津軽の歴史に輝かしい足跡を刻んできました。

わたしたちは、この伝統を誇りを持って継承し、よりいっそう活力に満ちた創造の精神を発揮して、郷土の限りない発展を願い、ここに村民憲章を定めます。

しごとに誇りをもち、くらしの豊かな村をつくります。

うつくしい自然を生かし、住みよい環境の村をつくります。

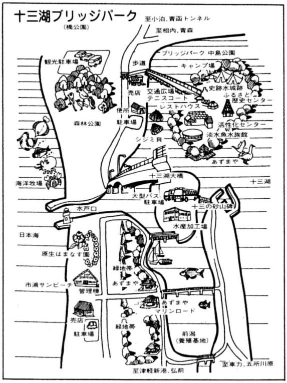
らんぼうな言動を慎しみ、文化の香り高い村をつくります。

むつまじい人間関係を築き、明るく健やかな村をつくります。

らくえんの郷土、市浦村を力を合わせてつくりあげます。

No.226号

いま、21世紀へむけて


十三湖ブリッジパーク
（橋公園）
至小泊、青函トンネル
至相内、青森
ブリッジパーク 中島公園
観光駐車場
歩道
キャンプ場
史跡水城跡
売店
交通広場
テニスコート
ふるさと歴史センター
レストハウス
便所
駐車場
森林公園
活性化センター
シジミ貝
淡水魚水族館
あずまや
十三湖大橋
海洋牧場
十三湖
大型バス駐車場
十三の砂山碑
水戸口
水産加工場
日本海
原生はまなす園
緑地帯
市浦サンビーチ
管理棟
あずまや
あずまや
マリンロード
売店
駐車場
緑地帯
前潟
（養殖基地）
至車力、五所川原
至津軽新港、弘前

新しい観光開発をすすめようーと
十三湖ブリッジパーク事業がスタートした。

地場産業の振興で地域の活性化

本村は、津軽国定公園を中心とする海と山と湖に代表されるすぐれた自然環境と恵まれた資源を有しており、県内外の都市圏域からの観光レクリエーション需要に対応できる地域です。

しかし、資源の開発や施設整備も不十分であることから、地域の特性を生かした新しい観光開発が望まれています。

本村においては、これまで過疎債や国、県単独の財政措置を受け、生産、生活基盤の整備をすすめてきましたが、一時に比べれば鈍化しているものの人口の流出は依然として続いています。

また所得水準も他の地域に比べて低位にあり、若年層の流出に伴う人口の高齢化も進行してきています。

このため村では、国、県の助成を得ながら、地域の特性を生かした新しい地域産業おこしをすすめ、地域経済の活性化を図ることにしています。

いま計画している主な事業としては、十三湖中島公園施設整備事業、山村地域資源高度活用促進モデル事業、過疎地域活性化プロジェクト事業、小規模漁場改良事業等があります。

これらの事業については、一部工事着工しているものもありますが、実施計画の概要についてお知らせします。

あわび魚礁の造成 中間育成施設も建設

脇元地区は、津軽海峡を主漁場とした釣漁業と刺網漁業、沿岸の刺網、あわび、ワカメ等の採取を主体とした磯漁業が営まれているが、漁業資源の枯掲、漁具資材の高騰等、漁家をとりまく環境は年々厳しさを増し、沿岸漁業の根本的な見直しと「捕る漁業から育てる漁業」への転換が余儀なくされています。

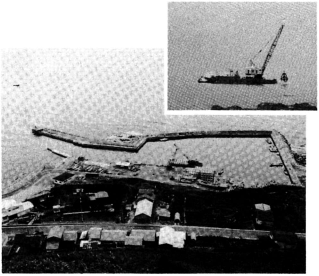
村では、第三期山村振興農林漁業対策の一環として、ことしから四ヵ年計画（事業費二億三千百二万四千円）で、脇元地区に小規模漁場改良事業（一億六百十六万円）、漁業経営近代化施設整備事業（一億二千四百八十六万四千円）をスタートさせました。

村の当初計画では、四万二千平方㍍の魚礁を設置し、三十ミリ程度のあわび稚貝を購入して放流するものであったが、この種のあわび稚貝の安定的入手は極めて困難であることと、県が種苗生産から採捕までの一貫生産体制の確立を推進していることもあって、比較的入手しやすい、十五ミリ程度のあわび稚貝を購入し、中間育成施設で育成、放流可能な三十ミリ程度まで育成機能を備えた、種苗供給施設も建設することになったものです。

本事業の初年度である今年は、四千九百五十八万円を投じて、一万九千二百平方㍍の漁場造成とM型、MM型ブロック、三脚A型ブロック等の製作、据付工事に着工、六十一年度には、漁業生産基盤の整備を完了させる予定です。

また、六十二年度からは二ヵ年の継続で、漁業経営近代化施設整備事業に着手し、養殖及び水産種苗供給施設（木造平屋建・三百六十平方㍍・事業費一億二千四百八十六万四千円）を建設します。

本事業が完了すると、不振を続ける沿岸漁業の振興と漁家所得の向上に結びつくものと、漁業関係者から大きな期待が寄せられています。


脇元地区では、あわび魚場の整備事業がスタートし、漁民の期待が高まっています。

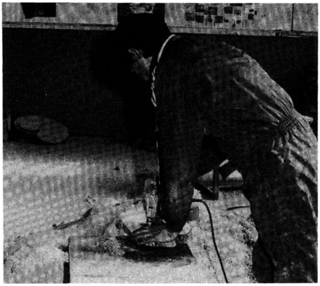
加工センターの建設 技能者育成も実施

山村地域資源高度活用促進モデル事業は、地域にある資源を高度に活用することにより、産業の活性化と就業機会の確保を推進、魅力ある山村づくりをすすめようと国土庁が六十年度からスタートさせた事業です。

初年度は市浦村を含めて全国で五ヵ所が指定となり、事業規模としては四年間で二億五千万円が基準、国が十分の五、県が十分の一を補助するものです。

村では、六十年度からヒバ材等を利用したテーブルや花台などを造る木材工芸センター（木造平屋建て三百七十三平方㍍）を相内地区に五千三百六十二万円で建設、六十一年秋ごろには完成させます。

また六十一年度には、五千万円で十三湖前潟付近に農水産加工センター（木造平屋建て二百七十平方㍍）を建設、市浦牛の加工やサケのくんせい、ウグイのかまぼこ、シジミエキスの薬用化などに取り組むことにしています。



地域の資源活用による特産品づくりが、盛んにすすめられています。

続いて六十二、六十三年度には、十三湖中島に一億八千万円で、活性化センター（木造平屋建て七百五十三平方㍍）を建設。同センターには、交流コーナー、体験実習室、安東氏資料室、民俗資料室、遺跡資料室、特産品消費拡大コーナー等を設置し、十三湖観光の拠点とする考えです。

施設建設のハード面だけでなく、人材育成などのソフト面に取り組めるのも同事業の特徴です。

人材育成では、六十、六十一年度の二ヵ年で三百四十三万円を見込み、六十年度は木材工芸センターを運営する木工加工技能者三人を育成。

六十一年度は農水産加工技能者三人を育てることにしています。

相内地区の史跡と中島施設を連結

「過疎地域活性化プロジェクト事業補助金制度」は、県が過疎地域振興特別措置法に基づき、前期の「魅力あるふるさとづくり推進事業」に引き続き創設し、地域の特性を見極めながら実効あるプロジェクトを企画立案、実施するのがねらいです。

個々の事業に対し補助するのでなく、地域産業おこし、観光開発、克雪など特定の政策課題のためのプロジェクト全体を対象とするもので、施設整備などのハード面だけでなく、調査研究、人材育成、普及宣伝、イベント開催などソフト面も対象とするのが特徴となっています。

娯楽から史跡巡りまで、魅力的な施設整備が予定されています。

村では昭和六十年度から六十二年度までの三ヵ年で約四億一千六百万円を投入し、安東氏に関係の深い十三湖中島や福島城跡、山王坊（日吉神社）遺跡、唐川城跡、大沼公園を有機的に結ぶ史跡ルートの整備計画を策定、県と協議を重ねていましたが、このほど事業指定の認可を得たことから、各事業の工事がスタートすることになりました。

昭和六十年度から三ヵ年で実施される施設整備は次のとおりです。

◆十三湖中島公園施設整備（三億九百二十万円）

▼中島園地造成、ローラースケート場、交通広場、公衆便所、キャンプ場、野外炉、駐車場、テニスコート、地域活性化センター、案内板等が整備されます。

◆福島城跡整備（一千九百七十万円）

▼城跡土塁保存、城門柵復元、駐車場、展望台、公衆便所、遊歩道、案内板等が整備されます。

◆山王坊（日吉神社）遺跡整備（一千九百七十万円）

▼遊歩道新設改良舗装、遺跡復元、木柵ゲート、広場、休憩所、四阿、駐車場、公衆便所、案内板等が整備されます。

◆唐川城跡（春日内観音堂）整備（二千三百五十万円）

▼遊歩道新設改良、展望台、四阿、公衆便所、案内板等が整備されます。

◆大沼公園施設整備（四千三百八十九万円）

▼遊歩道新設、ふるさとの森（植栽含）、四阿、公衆便所、駐車場、野外炉、遊歩道橋、案内板等が整備されます。

本村には、このところ遺跡や史跡を訪ねる人が多くなってきましたが、特に山王坊遺跡は専門家から注目を集め、東北大や東北学院大学の学者が毎年発掘調査を行っています。

市浦村の花・木・鳥

◆制定・昭和六十年十一月一日　市浦村誕生三十周年記念

村の花

村の花　月見草（大待宵草の通称）

葉・長楕円形で先がとがり、辺縁に浅い鋸歯がまばらにあり、中国医術のメスの形に似て、村の医療と住民の健康が保たれることを象徴する。

花・花は可憐で詩情に溢れ、親花が散れば次に子花が咲き、孫花が咲きつぎ寿命が長い。

●花弁の四、雌しべの柱頭の四は、津軽文化発祥の地四浦町（市浦村）の歴史と符合する。

村の木

村の木　ヒバ（学名　あすなろ）

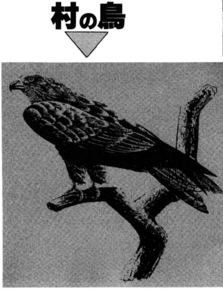
葉・年中緑あざやかな色を保ち、ひすいのごとく清純な心を示す。安東氏が桧扇に真羽を持って家紋とした故事と関係する。

花・真冬に開花する強さをもち、一樹に雄花、雌花を咲かせ夫婦の和合を象徴し、子孫繁栄を示す。

材・材質は細密で黄白色の光彩を持ち、建築材、木工品にすぐれている。

樹皮・内皮を柔らかい繊維として製法し、十三湊水軍船の漏水防止に使用。

村の鳥



村の鳥　とんび（鳶）

容姿・地味で華美を好まず眼光鋭く、未来を見透す眼力を持つ。

●大きな輪を描いて飛ぶ姿は大様で、人の和合とロマンを表現する。

●羽が安東氏の紋章と類似している。

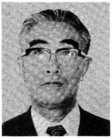
30周年を表彰

功労表彰

白川治三郎さん

昭和四十六年五月十八日から三期十二年間市浦村長として在職しました。

在職中、市浦村コミュニティセンター、老人生きがいセンター、B&G財団市浦海洋センター建設等に功労しました。



葛西善六さん

昭和三十一年十一月二十五日から昭和四十八年三月三十一日まで市浦村収入役として在職しました。葛西さんは昭和十九年三月から昭和三十年三月までの十一年間、脇元村収入役にも在職しました。

祝 市浦村誕生

功績を讃え17人

柏谷 秀一さん

昭和三十年三月三十一日から昭和五十八年九月三十日まで約二十年間村議会議員として在職しました。また、昭和三十八年五月から市浦村長を二期務め、市浦中学校の統合校舎の建設等に尽力しました。市浦村教育長として現職。

福井 俊美さん

昭和四十二年四月二十九日から村議会議員、現在に至る。

表彰条例を制定

市浦村では、村誕生三十周年を記念し、表彰条例の制定を検討していましたが、去る九月開催した村議会で議決、その第一号が市浦村誕生三十周年記念式典で表彰することを決めました。

この条例は、村の政治、経済、文化、社会等各般にわたって村勢の振興に寄与し、又は村民大衆の模範となる行為のあった者を表彰するものです。

表彰は、功労表彰、善行表彰及び特別表彰の三種類とし、功労表彰の基準を次により定めています。

村長職にあって十二年以上在職した者。

村議会議員の職にあって十六年以上在職した者。

任命について議会の同意を得て選任される各種委員及び公選、議会の選挙による委員並びに助役及び収入役の職にあって十六年以上在職した者。

消防団長の職にあっては、十六年以上、副団長、分団長の職にあっては二十年以上在職した者。

善行表彰は、本村の公益事業に尽力し、又は公務を助力する等その功績が顕著な者。

村の公益のため百万円以上の金品を寄付した者。

一般村民の模範になるような善行をした者。

特別表彰は、本村の出身者であって、村内外において著しい功績をなし、一般村民の模範となり、郷土の誇りとなる者となっている。また、条例では団体に対しても準用することとしています。

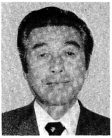
この条例の制定により、市浦村誕生三十周年記念式典で第一号が表彰されますが、村では功労者の氏名、その他必要事項を功労者名簿に登録し、その功績を讃えることにしています。

村元 富弥さん

昭和三十五年二月一日から昭和五十一年一月三十一日までの十六年間、村議会議員に在職しました。

秋田谷 久助さん

昭和三十一年二月一日から昭和五十一年一月三十一日まで十六年間、村議会議員に在職、昭和五十三年十一月七日勲六等単光旭日章受賞。



木村清左衛門さん

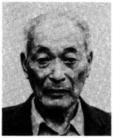
昭和三十一年二月一日から村議会議員、現在に至る。

木村 義光さん

昭和三十九年二月一日から村議会議員、現在に至る。

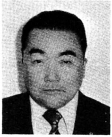
工藤 武義さん

昭和三十五年二月一日から昭和五十一年一月三十一日までの十六年間、村議会議員に在職しました。



藤田 弥男造さん

昭和三十年三月三十一日から昭和五十一年一月三十一日まで十六年間、村議会議員に在職、昭和五十四年五月七日勲六等単光旭日章受賞。



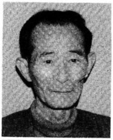
秋田谷 納さん

昭和三十九年五月一日から昭和五十八年十月十四日まで十九年間、消防団長に在職しました。

秋田谷 兼吉さん

昭和三十一年三月一日から昭和五十五年二月二十八日までの二十四年間、村農業委員に在職しました。

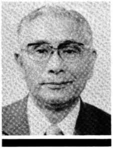
特別表彰



豊島 勝蔵さん

昭和十年三月三十一日から昭和四十九年四月一日までの三十九年間、教員、校長に在

職、郷土史の研究、市浦村史の編さん、研究の成果に基づく書物を数多く著述出版。



藤田與右衛門さん

昭和十二年四月一日から昭和四十四年四月一日まで三十二年間、青森県巡査、巡査部長、警部補、警部、警視、警視正、警視長、県消防学校長を歴任。県内の治安保持と民生の安定に尽力されました。

善行表彰

安田　喜美代さん

十三あけぼの会（安田喜美代代表・会員百八十四人）

昭和五十九年十二月、十三小学校に対し、運動用具百十七万円相当を寄贈、学校教育の向上に貢献しました。

吉田　秀博さん

▼吉田工業株式会社（吉田秀博代表）

山村広場野球場ネット型バックスクリーン工事一式百六十万円相当の工事一式を寄贈、住民福祉の向上に寄与されました。

生稲　精子さん

（尚花愛児園々長）

故伊東きよの氏の遺志により、昭和五十九年一月十二日二百万円を寄付され、社会福祉の向上に寄与しました。

村では「伊東きよの基金」として社会福祉協議会へ補助し、高額療養費資金貸付を無利子で貸付しています。

市浦村行政改革
大綱決まる

― 事務事業の見直しなど10数項目 ―

昭和六十年四月二十五日設置した「市浦村行政改革推進本部（本部長・三重貢村長）」は、これまで「行政改革懇談会」を発足させ、行政改革大綱の策定を検討してきましたが、去る八月二十日本部、懇談会合同会議を開催し、事務事業の見直しなど十数項目に上る村行政改革の大綱を決定しました。

村では、多様化する住民ニーズに応えるため、行革大綱を積極的に進め、住民福祉の向上と地域社会の活性化をはかることにしています。

基本方針

地域社会の活性化と住民福祉の増進

㈠　市浦村を取りまく厳しい行財政環境のなかで、多様化する行政需要に対応しつつ、新規政策の展開と、地域社会の活性化及び住民福祉の増進をはかるため、行政改革を推進する。

㈡　行政改革の推進に当たっては「市浦村行政改革懇談会」の意見と提言を尊重し、議会と連携しつつ全庁が一体となって取り組むとともに、村民をはじめ関係方面の理解と協力が得られるよう努める。

◆事務事業の見直し

▼使用料・手数料の改定を行う。

▼住民登録の写しの料金を枚数制の料金に改める（60年度）

▼公営住宅使用料及び放牧料等を適正料金に改める（60～61年度）

▼図面の謄写を有料とする（60年度）

◆補助金・負担金の見直し

▼一般運営費のみに充当する補助金は廃止の方向で検討する（61～62年度）

▼零細補助金の統合メニュー化、奨励補助金の終期の設定等整理合理化を進める（61～62年度）

◆組織・機構の簡素合理化

▼村の一体制確立と、財産管理の効率化・一元化を実現するため財産区を統合する方向で検討する。

▼合併協定書に定めるところに基づき、出張所の廃止について検討する。

▼他の公共的施設の整備充実に伴って、利用価値が減少した児童館を廃止する。

▼審議会、委員会について休止状態又は設置目的の薄れたものの廃止、及び同類項に属する組織の整理統合を進める。

▼現在、村直営となっている農業共済事業を広域の組合合併方式に転換していく。

◆定員管理の適正化

▼組織機構の合理化により、定数を削減する。また、季節的業務等特殊事情のある部所については、定数内職員を置かず、パート雇用等によってカバーし、人件費の増加を抑制する。

◆民間委託、ＯＡ化等事務改革の推進

◆学校給食業務の効率的合理化をはかるため、現在の単独調理場方式から共同調理場方式にする。

◆簡易水道の経営合理化をはかる。

▼浄水場を無人自動化にし、人件費の節減をはかる（60年度）

▼集金業務を金融機関を活用しての自動払制にする（60年度）

◆事務のＯＡ化について検討する。

◆会館等公共施設の設置及び管理運営の合理化

▼村直営の畜産施設の管理運営を畜産公社へ段階的に移管する。

第6回 あすを拓く ふるさとまつり しうらむら

11月2日から4日まで

より豊かな文化を創造し、心の交流と豊かで活力のある郷土の発展を目指して開く「ふるさとまつり」。

このまつりは、昭和五十五年「公民館まつり」としてスタートし、五十七年のコミュニティセンター完成を契機に内容を充実させ、名称を「あすを拓く、ふるさとまつり」に改めたものです。

数えて今年は六回目、十一月二日から三日間、市浦村コミュニティセンター、市浦海洋センターで開きます。

会場では、日常生活用品や地元生産品を紹介するのはもちろん、村民の皆さんに安い価格で品物を提供し、地元産業と文化面への認識を深めてもらおうと、十一のコーナーを開設しています。

秋の一日を楽しく過すためにお誘い合わせておでかけください。

文化講演会と映画のつどい

安東文化のふるさとを探る

十二世紀から十五世紀にかけて、十三湊を拠点に強大な勢力を誇っていた安東一族―。

市浦村はいま、津軽安東文化発祥の地として脚光を浴び、昨今の古代史ブームも手伝って、安東氏、東北人のルーツを解き明かそうとする多くの人たちの興味をそそっています。

安東氏――。自分たちの先祖がかかわったであろう壮大な歴史のロマンに思いを馳せ「安東文化のふるさとしうら」のえにしえを探る絶好のチャンスです。

講演「安東文化のふるさとしうら」

講師・福島県三春町歴史民俗資料館、館長松本　登氏、

映画「この子を残して」

青少年健全育成推進映画です。親子連れの観賞をお待ちしています。

家族でおいでください

しうらのあけぼの ミニ歴史展

—三春町などから特別出品—

村内の遺跡から発掘した出土品や長髄彦一族が諸族と混血し荒吐族となり、信仰の表象とした荒吐神像の土偶、鬼面などを展示するほか、安東氏ゆかりの地、福島県三春町の歴史民俗資料館からも特別出品される「ミニ歴史展」である。

しうらに発祥し三春町に終わった安東一族の歴史とロマンが展開し、心を同じくする人びととの結びつきが深まることを期待しています。

村民美術展

—児童・生徒の部—
書道、絵画、作文、版画
—一般社会人の部—
書道、絵画、写真

村民美術展は、毎年開かれているが、ことしも数多くの作品が出品されています。

美術展の表彰式は十一月二日、午前十一時から市浦村コミュニティセンターで行われます。

ジョイントコンサート 市浦出身の3大歌手 ふるさとに唄う

出演歌手

民謡・鳴海重光さん
（相内出身）
歌謡・伊南善仁さん
（磯松出身）
歌謡・相川光男さん
（十三出身）

ふるさとまつりでは、芸能保存会や地区婦人会などが中心になって、芸能発表会を開いてきたが、ことしは村誕生30周年という節目の年。

多忙なスケジュールの中を市浦村出身の３大歌手がふるさとに帰り、初のジョイントコンサートを開く。

ふるさとまつりのメーンエベントとなる。

○と　き　11月３日
13:00～16:00
○ところ　市浦村コミュニティセンター
○入場料　無　料

米の消費拡大コーナー

—米料理で市浦の味を—

米は日本の風土によく合い、私たちの主食として受けつがれてきたが、近年若い層や子供たちの間で米ばなれが目立つようになってきました。

市浦村では、まつり期間中「みんなで育てよう市浦米、市浦の味」をテーマに、米の消費拡大コーナーを設ける。このコーナーでは、金木地区農業改良普及所の協力で、米料理の実演やもちつき大会、母と子のおにぎり教室などを開きます。

○期間中の実演内容は次のとおり。

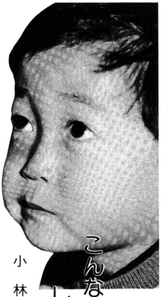
	実　　演	時　間	実　　演	時　間
11月2日	○もちつき大会 雑　煮 きなこ	12：30 ～	○米料理を中心にした食生活工夫展示	期間中 10：00 ～ 16：00
11月3日	○米料理実演 だまこもち 和風カステラ 三五八漬の素	11：00 ～ 12：30	○みんなで作ろう うんべいもち ようしもち ○老人と子供のふれあいコーナー なわのない方 わら細工	13：00 ～ 14：30
11月4日	みんなでつくろう 「母と子のおにぎり教室」 お母さんと一緒に、おにぎりをつくろう	11：00 ～ 12：30	食生活工夫展 表彰式 優秀作品の紹介	13：30 ～ 14：00

◆物産展　野菜即売11月3日
牛肉即売11月4日

◆交通安全カラオケ大会は11月4日午後6時30分から行う。

瞳は未来へ

自立と連帯　30周年に寄せる希望と意見



こんな村にしたい

小林　猛
（相内小・六年）

ぼくが住んでいる市浦村は緑がいっぱいあってとてもいい所だ。だが、だんだんゴミが多くなった。だから、ぼくは、ゴミのない村にしたい。

今、海、山、川に多くのゴミがあるからだ。

海や川に釣りに行って、ゴミをすてる人。

どうしてゴミをすてるのだろう。

次にきた人が困ると思う。

それから他の市町村の人が来ると、

（きたない村だなぁ）

と思っている人がいると思う。

一人がすてると、次々にすてていくのだ。

だから一人のせいで、多くの村の人が、はずかしい思いをする。

もちろん、釣り人だけではない。山菜をとりに行く人。山や海に行く人もだ。

だから、海や川、山に行く人は、ゴミを持ちかえるか、きめられた所にすてればいいと思う。ぼくは、一人一人が、気をつけて、ゴミのない豊かな村にしたいと思っている。

私たちの村

奈　良　美　香
（相内小・六年）

私たちの住んでいる市浦村は、緑が豊富で、湖や海が近く、食べ物にも不自由していません。また古くからの歴史的な物も、発掘されています。

たとえば、土器とか、お金とか骨格器など、むかしの生活に、使われた物が、数多く掘り出されています。

私は、市浦に、住んで、今年で二年目に、なるけれど、いろいろと勉強しているうちに、市浦の偉大な、古い歴史が、いっぱいねむっていることを知りました。

十月五日に、読書教室で、バスに乗って、山王坊へ、行きました。山おくへと、坂道を下って行くと、つい最近まで、発掘していて、柱を建てた後や、木を焼いた後の炭が見つかったり、縄文式土器のかけらなどが、見つかったそうです。そして、それらが発掘された後には、私たちの手に、ふれさせないために、シートなどをかぶせてありました。そこらの近くには、うまっていた石を掘り出した後ものこっていました。こんなにむかしからのものが、あるんだから、市浦に、住んでいる私たちは、いばれそうにも、思えます。

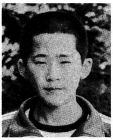
またお母さんたちが、安心して働けるテクニカの、会社があり、私たちには、プールや運動する建物があるので、とても、まんぞくしています。

一つだけよくを言えば、私は、時々目が、かゆくなって、五所川原の病院に、行ったりするので、眼科の先生が、いれば、いいなあと思います。

農業や林業が、さかんな村なので、私の家でも、まきストーブに、しました。村全体が、平和な感じのする所だと思います。

日本一の牧場に

山　本　貴　一
（太田小・六年）



ぼく達の村は、田や畑が少しよりありません。また気候は、春や夏には、冷たいやませがふいて、作物があまりよくできません。

ぼくは、これからの市浦村では、まわりの山をかいこんして牛の放牧場にして、牛をうんとふやして、牛の生産地にしたいと思います。

ぼくの家では、肉用牛を、飼っています。親牛は、十九頭で子牛は、十五頭もいます。それで大変いそがしいです。

ぼくと、弟の博一は、牛の世話を、手伝うことにしています。手伝う仕事は、まず牛にわら草などを入れている所に、残っているわらを、子牛の方に集めていきます。ほうきで、きれいにはいていきます。次に、ふすま、モーレット、大豆、はんしょくを、はいた所にくれていきます。くれていく量は、きまっています。バケツいっぱいに、入れてそれを、たるの小さいのに入れてから、くれていきます。ふすま、モーレット、大豆、はんしょくを一ぱいずつくれていくと、おわってしまいます。

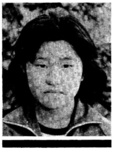
土曜日や日曜日は、牛のうんちをはこび出すのを手伝います。牛のうんちはしきわらと、いっしょにはこび出すのですが、ぐちゃぐちゃして、とてもくさいのですが、がまんしてやります。運んでいるうちに、うんちのくさみが、着ているトレパンに、しみこんでしまうような気がします。

毎日牛の世話をしていると、牛もぼくたちになついてくるので、とてもかわいいです。とくに、子牛は、えさを持っていくと、よろこんでとびはねてきます。

市浦村の広い草原に牛を、たくさん放して、日本一の食用牛の生産地にし、市浦村の名を、全国に広まるように、お父さんのあとをついで、がんばりたいと思っています。

自然をはかいしないで

武田寿美枝
（太田小・六年）



わたしたちの市浦村は、今から三十年前に、相内村・脇元村・十三村の三つの村が合併して、新しく市浦村としてたんじょうしました。

市浦村は、青森県の津軽半島の北部にあり、十三湖のふもとに広がる農村です。村の大部分は、国定公園に指定された、景勝な観光地です。

市浦村は、案外面積はせまいし、田や畑が少ないので、牛を飼っています。

春には、雪の消えた放牧場に、新緑の牧草がいっせいに芽を出し緑のじゅうたんをしきつめたような感じで、その上を春風がわたる頃には、長い冬ぐらしから、開放された喜びを感じます。

わたしは、こんな頃の市浦村が大好きです。

夏になると、休日を利用して、県内の各地から、涼しさを求め、十三湖にしじみ取りをかねて、市浦村を訪れる観光客でいっぱいになります。湖のあちこちから家族連れできた人たちは、しじみをとるのに、むちゅうです。時々、子ども達の甲高い歓声が、あちこちから聞こえてきます。

秋の紅葉も、とても美しいです。学校の南がわの小高い雑木林は、一雨ごとに紅葉が増し、秋が、だんだん深まっていくのがわかります。うるしや、ぶどう、かえでの葉が、赤、黄、だいだいと紅葉し、とてもきれいです。

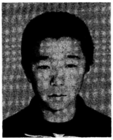
わたしたちの市浦村は、このように、美しい大自然にかこまれています。

わたしは、こんな美しい自然の中で生活することに、感謝し、ほこりにおもっています。

この美しい、市浦村の、自然かんきょうを、はかいすることなく、いつまでも残していきたいものだと、思っています。

脇元のゴミ

櫛引健
（脇元小・六年）



魚が泳ぎ、波音をザーザーと立てる広々とした海。それに対して、空高くそびえる、もや山。

ぼくは脇元の自然が、すばらしいと思う。

だがそのすばらしい自然がみんなの手で汚されている。例えば道ばた。道路の周りを見ると、ゴミがあたりかまわず捨てられている。

もしも脇元小学校の児童、九十七人が一日一人あたりに空きカンを三個ずつ脇元のあちらこちらに捨てるとすると、一週間では二千四十七個、一ヵ月では、八千七百三十個で、半年ではなんと、五万二千三百二十個、それで、一年ではなんとなんと、十万四千七百二十個までになってしまい、脇元はゴミの山となってしまう。

げんに脇元と磯松を結ぶ道路のわきが、空きカン、ビニールのふくろ、空きビン、など色々なゴミがちらばっていて非常にきたない。このようにした原因の半分はそこを通る見知らぬ人かも知れない。だがもう半分は、みんなが悪いのではないのだろうか。

捨てるみんなは決して脇元をよごそうとして捨てるのではないだろう。ゴミ箱がないからしかたなしに捨てる人やゴミ箱に入れるのがめんどうだから捨ててしまうという人が多いのではないだろうか。

捨てる人はどんな気持ちでゴミを捨てているのだろうか。もし、脇元にゴミの山を造る気持ちで捨てるとなると大問題だ。そんな人が何百人もいればこの脇元はほんとうにゴミの山になってしまう。

逆に、脇元をきれいにしようという気持ちの人が何百人もいればこの脇元は空気がよくなるほどきれいになるはずである。

ぼくたちの学校を見てみよう。ゴミがたくさんちらばっている。空きカン、アイスの棒、スナック菓子のふくろなどが学校の周りに落ちている。先日、学校の近くで岩木大祭があった。ゴミはもちろん出た。グランドはとくにすごかった。グランドに、焼鳥のくし、カップなど色々な物が捨てられていた。

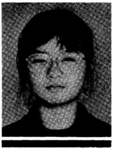
だれが捨てたのだろう。脇元小学校の生徒は、一人も捨てていないだろうか。

脇元のゴミの半分は見知ぬ人が捨てて行ったかもしれないが、もう半分はみんなが捨てて、いるのではないだろうか。

脇元をきれいにする気持ちを持とう。

山王坊

櫛引晴子
（脇元小・五年）



ここに、この場所に、
本当にあったのだろうか。
こんな山の中に、
杉の大木にかこまれ、
昼もうす暗い、
草ぼうぼうのここに。
何百年も前に、
立派なお寺があったなんて。
かびくさい匂いがする。
からすが鳴く。

「ここが山王坊のあとです。」
案内の人が言われた。
土の中の大きな石を、
私はもう一度見つめた。
しゃがんでじっと見た。
赤ちゃけた石。
さわってみたら、
ぼろぼろと表面がくずれた。
焼けた石だ。
焼かれた山王坊あとの石だ。

だれがつくったのだろう。
何のためにつくったのだろう。
どんな人たちが、
どういうふうに、
ここを通ったのだろう。
何を祈ったのだろう。
どうして、
焼かれてしまったのだろう。
ああ、
祖先の人たちの気配がする。

杉の大木の下に、
何百年もの歴史を秘め、
静かに眠っていた山王坊あと。
今、目をさまして、
私たちに語りかけようとする。
私は聞きたい、
私は知りたい、
私たちの歴史を。
私が、
何をしなければならないか。